

明治三十九年十一月二十日印刷

明治三十九年十一月廿五日發行

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

編輯
兼
發行
者

市 島 謙 吉

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷者

本 間 季 男

東京市京橋區新榮町五丁目三番地

印刷所

內外印刷株式會社分工場

夫木和歌抄卷第二十八

雜歌十

題

草	山橘	海松	忘草	萱	麻	母子草	莞草	夕陰草	和布
竹	淺茅	藻	百代草	濱木綿	萍	駒繫	射干	指燒草	
篠	茅花	菰	白慈草	小々妻	淺砂	犬子草	莎草	葎	
葛	蘗	蓬	爾古草	藍	蓼	土筆	芝	手向草	
苔	鞭草	思草	木	紅	芹	折敷草	山菅	芭蕉	
日陰草	蘆	忍草	菅	紫	水葱	鐘草	目覺草	莫鳴菜	

草

入道釋阿九十賀屏風御歌
源順家馬毛名歌合（あま
のつむいそな草）

さをしかのゐるの、秋のした露にたれつまこめて草むすふらん
須磨の蜚の朝夕つめるいそな草けふからむちはなみそうちける

後京極攝政
よみ人しらす

障子繪に舟にのる人あ日はまにもくつおほくよせたる所

沖つなみゑきりによする濱邊にはもくさかき分かひもひろはん

祭主輔親

里のあまといふ所な（も
しほ草）

もしは草かきあつめたるかひありてみるめうれしき里のあま
人たまならぬもしはの草もいかてかは藤江の浪にとはてすくへき

法印素覺

家隆卿せうそこして侍け
るかへし

つゆけくもなりまさる哉さくらあさのものとゑた草拂ふ人なみ

皇太后宮大夫俊成卿

家集もとのした草

おほあらきの本あらゑの埋れ草さも老らくの末そいふせき

元信實朝臣

六帖題うもれ草

春のゝはおひぬものなく見ゆれとも思ひいて草はなきよ也けり

忠源師賢朝臣

家集春歌中（おもひ出ぐ
さ）

ものおもふこひちや冬のほかならんこの草は霜かれもなし

慈鎮和尚

戀歌中（こののくさ）

春のなみのいりえにまよふはつ草のはつかにみてし人を戀しき

從二位家隆卿

百首御歌初戀（こひくさ）

雲葉新勅戀

前中納言定家卿

千五百番歌合（はつくさ）

冬歌中（冬のわかくさ）

前中納言定家卿

冬歌中（冬のわかくさ）

雲葉

前中納言定家卿

竹

千五百番歌合

題不知

海道宿次百首竹の下

正治二年百首御歌

貞應三年百首歌

百首歌

六帖題

家集法文歌

家集野遊

春日社百首

二夜百首御うた

旅十五首

家長朝臣すいめける日吉

社竹間雪

この君とたのめて植しから人のちよのちきりやいまのよのたけ
 梅の花ちらまくおしのみわか園のたけのはやしにうくひすなくも
 山ふかきすきのえけみをふきおちてふもとによわる竹の下かせ
 雪つもるありあけの月は影さえてまかきの竹のうらみとりなる
 雨おもきまかきの竹のをれかへりくたれはのほる露のえらたま
 いはにそふ竹のさえたのえたれるやねに行鳥のとまるなるらん
 新六五
 さと人の軒端のたけのみしめ縄かけていのりしゑるしあらはせ
 いまはとて衣をかけたけのはのそよさそいかに悲しかるらん
 竹の葉にかけし衣のなこりかはとらふす野邊もむつまじきかな
 たけの葉にころもをかけしいにしへの人の心はなき世なりけり
 君ゆゑにとらふす野邊に身を捨てたけのはやしの跡をたつねて
 つなてひく竹のしたみちきりこめて舟ちにまよふよとの河きし
 神かきやおまへの竹に山おろしのたゆめはつもる庭のえらゆき
 はしたかのきりふの岡のたけの露をおふさの鈴とみかく月かけ

小侍 從

よみ人 未らす

爲相 卿

後鳥羽院 御製

爲家 卿

光俊 朝臣

衣笠内 大臣

同 院 宣旨

六條院 宣旨

隆祐 朝臣

後京極 攝政

同

從二位 家隆 卿

同

寶治二年百首里竹

百首歌

堀河院御時百首

家の集竹の子をおさなき物につかはすとて

返し

六帖題

文應元年七社百首

弘長元年百首吳竹

寶治二年百首

六帖題寶治二年百首里竹

百首歌

八月十五夜内裏御會

光隆院入道二品親王家五十首竹霜

文治二年女御入内御屏風

洞院攝政家百首

弘長元年百首竹

風ふけは竹の葉そよくあき玄の里もさむけきゆふまくれかな

竹の葉もたもとにおちてからころもきなれの里のゆふへ露けし

むらさきのたけのまかきのふちはかま契りありてや匂そめけん

いにしへの七のかしこきひとみな竹をかさして年そへにける

おやのため昔の人はぬきけるをたけの子のため見るもめつらし

雪分てぬくこそおやのためならめこはさかりなる竹とこそみれ

いかばかり雪の下なるたけのこのおや思ふ人のこゝろ玄りけん

いつくよりおほし立たる竹の子のならの葉分のかけによるらん

年たけてみかりにあひしこのかはの人の名残やきしのくれたけ

くれ竹のよゝの昔にかけおきしたまかと見ればあられなりけり

見わたせはなみもかすみて河かみのゆつはのむらになひく吳竹

時わかぬおのか枯葉はつもれともいろもかはらぬにはのくれ竹

月きよみたまのみきりのくれたけにちよをならせる秋風そふく

五代までなれてふりぬる川たけのまたまたかけに霜をおきそふ

ひさしかれ君ちよませの河たけにいろはへまさとこなつの花

風ふけはみきはになひくかは竹のおともあらはにこほる浪かな

もゝしきの玉のみきりの御溝たけ君か代なかくうへやそめけん

衣笠内大臣

正二位知家卿

從二位家隆卿

仲實朝臣

大江匡衡朝臣

よみ人ふらす

光俊朝臣

民部卿爲家

後九條内大臣

光俊朝臣

從二位賴氏卿

從二位家隆卿

前中納言定家卿

同

隆信朝臣

從二位賴氏卿

常磐井入道太政大臣

三島社七百首歌

長歌

なよ竹の^二とをよる風のすゝしきはひとよへたて、秋やきぬらん
あきやまの^一、^やゑたへるいもな、なゆ竹の、とをよるこらは、いかさ
まに、思ひをりてか、

天元四年四月小野宮歌合なそくいれのおひたるかひつ物

久安百首笛竹

長承三年六月常磐井五番
歌合竹風晚涼

六帖題一よへたつ

建保三年內大臣家歌合
竹風

だい志らす

しのへ竹

ある女にふしゑげき竹を
たふとて

家集雜歌中

洞院攝政家百首山家

長承三年七月常磐五番歌
合竹風晚涼

百首御歌中

賀茂社百首御うた

秋またぬいねかと見しはなよ竹の下葉にねさすこにこそ有けれ
笛竹をねくらにならすうくひすはさへつる聲もことにや有らん
ふえ竹にふすとの音もすゝしきは秋のまらへに風やふくらん
新六五 山かつの垣ね新六ほにかこふわれ竹のよませになとてあひみそめけん
風ならでとふ人もなきともなれや身をかくしすむ谷のくれたげ
萬十九 わか宿のいさゝむら竹ふく風のおとのかそけきこのゆふへかな
新六六 うきふしを思もいれすまのへ竹まのへとねこそまつなけれけれ
古來歌 まの竹の節はあまたに見ゆれともよゝにうとくもなり増るかな
われなれや風をわつらふまのたけはおきふしものゝ心ほそくて
かきこむるの竹の園そのにをかや吹あつまやかたはみやこにも似す
ゆふされはまのゝはやしに風吹てやなきのさとそ夏はすゝしき
人こゝろ神にたかはゝまの竹のゆかまなかたをためて見よかし
ふる雪にかものかはらを見渡せはたゝすの竹もまをれにけり

權僧正公朝

人丸

よみ人志らす

待賢門院堀河

皇太后宮大夫俊成卿

光俊朝臣

從二位家隆卿

よみ人志らす

衣笠内大臣

兵部卿御元良

西
行
上
人

常磐井入道太政大臣

源 仲 正

慈鎮和尙

同

題不_レ知

弘長二年若宮百首

千首歌

建保元年老若五十首歌合

六帖題

六帖題から竹_イ

建長七年顯朝卿家千首歌合

篠

別_レ妻時

題不_レ知

保安三年法性寺入道前關
白歌合野風

弘長二年箱根宮百首

文永四年毎日一首中

同七年毎日一首中_イ

冬か今日たゝすのみやの吳竹に賀茂のみやまの山おろしのかせ
 萬代ふる雪にとよらの竹の埋もれてひとよも見えすなりにけるかな
 はこねちや山風そよくさゝ竹の玄のにみたれてあられふるらし
 山かつのさかひになひく若竹のわか／＼しくて世をやすきなん
 にしのうみあらいそなみにより竹の一よになりぬ冬の日かすは
 新六_六かすならぬまつか垣ほのあはら竹すゑをりかけてよをや過さん
 同から竹のふえにまくてふかはさくら春おもしろく風そふきける
 うゑ竹のもとさへとよみ風ふけはそよゆら／＼にわれ忘れめや

萬二_二新古
 さゝの葉はみ山もさやにみたるとも我は妹思ふわかれきぬれば
 萬七かくしてや猶や老なんみ雪ふるおほあらきのゝ篠にあらなくに

古來歌

からさきやなからの山にあらねともをさゝなみよるまのゝ秋風

なかもやるたかねは春の日かけにて谷のさゝふにきえぬしら雪

くるゝ夜そ限りなりけるいなみ野の篠分る道のはても見えねは

世々をへてうへさえけらし嵐山いはねのをさゝしもさやくなり

慈 鎮 和 尙

よみ人ふらす

安嘉門院四條

民部卿爲家

後鳥羽院御製

信 實 朝 臣

正三位知家卿

光 俊 朝 臣

人 丸

よみ人ふらす

機中納言師俊卿

安嘉門院四條

民部卿爲家

同

同
文永五年毎日一首中

家集冬歌

洞院攝政家百首

建保五年内裏御歌合

百首歌冬

家集月歌

御集忍戀

建保七年家千首歌

寶治二年百首御歌

同

同

同

同

同

さやくらんをさゝの霜はまらねともはるかに白きひらの山の端

月さえてゆふ霜こほるさゝのはにあられふるなりさらしなの山

秋は來ぬ露もあらしも月やまつそよさらしなのやまのたまさゝ

むさしのや草はみなからうら枯れてあられにのこるさゝの音哉

うちまくれふるさと思ふ袖ぬれてゆくさき遠きのちのさゝはら

此歌あづまへ下けるに野ちといふ所にて日くれかゝりて時雨

しければと云々

いなみのやむこ山もとのをさゝ生に浦風さやきあられふるなり

さよすから武庫の浦風さえくゝて月そくまなきむなのさゝはら

時雨ふるおほあらしのゝ小さゝ原ぬれはひとつとも色にいてめや

さゝの葉もうへ白妙に見ゆるまておほあらしのみに雪ふるなり

さゝの葉のさやく霜夜は水くきの岡のやかたにふしそわひぬる

そめておくやしほの岡の玉さゝは君か八千代のするのみとりを

よひくゝにさゝわくる袖は露おちて誰かまのひの岡のかよひち

嵐ふくさのゝをかへの朝つゆにさゝわけころもぬれつゝそゆく

かれぬるかころものあきも神なひのあさ笹はらのまもの下くさ

さゝわくるきみよひかへせ古里のならしの岡のとりねならは

同

從二位家隆卿

同

順德院御製

安嘉門院四條

同

權大納言實家卿

鎌倉右大臣

前大納言顯朝卿

後嵯峨院御製

俊成卿女

後九條内大臣

衣笠内大臣

同

光俊朝臣

寶治二年百首御歌

建長八年百首御歌

正治二年百首

千五百番歌合

百首御うた

家集さいな

洞院攝政家百首忍戀

六帖題

家集康元二年毎日一首中

千五百番歌合

大嘗會主基方御屏風

あやめな

六帖題

くれかゝるならひの岡を來てみれば露のみまけきをさゝはら哉

露むすふ小さゝかはらを見渡せばきそのみさかに秋はきにけり

雨のゝちみきはのをさゝ風ふけはつゆにたまそふ池のはちす葉

花にあかぬよしのゝおくの篠まくらいとはぬ月の雲かくれかな

五月雨にふる野のをさゝみかくれて雲にぞらなき三輪の山もと

山河のいはまのさゝはひたすらにまのひし節はあらはれにけり

うへしける垣根かくれの小篠はら知られぬ戀はうきふしもなし

山かつのまつか垣根のさゝくろめにきはふまての住家とやみし

いもせ山なかにおひたる玉さゝのひとよのへたてさもそ露けき

葛 草木雖未勘暫就草字草部入之

いかばかり久しかるらんかめやまのふもとの松にましるさき草

春ことにはこやの山にさき草のよろつよかけてとのつくりせり

あはつのはきはきか花にいろそへて時をりかほにましるさき草

新六ふへき宿のさき草ひき分てみつはよつはにふくあやめかな

いとゝ又作りますらんさき草の三つ葉四つ葉のさゝかにのやと

鷹司院帥

左近中將具氏卿

宜秋門院丹後

具親朝臣

慈鎮和尚

俊頼朝臣

前中納言定家卿

信實朝臣

同

民部卿為家

家長朝臣

宮内卿永範

卜部兼直

正三位知家卿

苔

延長四年御屏風

延喜七年御屏風

こけを

家集祝こころを

堀河院御時百首苔を

同

同

家集苔上雪

文集百首

述懷百首こけを

千五百番歌合

保安二年九月内大臣家歌合庭露

承久元年内裏御歌合庭苔

千首歌

こけなかくおふるいは井の久しさを君にくらへん心やあるらん
續古今賀家六四
 千代をふる松にかゝれる苔みれば年のをななくなりけるかな
六四六二新古今賀窮恒集
 ときはなる松にかゝれる苔なれば年のをななきえるへとそ思ふ
 萬代をなからはまのさゝれいしはこよひよりこそ苔は蒸らめ
 さよひめの遊ぶところかおく山のをねかみねの苔のむしろは
 ふかみとりいはねか上にむす苔や空にのほらぬけふりなるらん
 年ふれば苔のみつらをゆひわけていはのすかたは神さひにけり
 としへたるいはほかに雪ふりておひにけらしな苔のまらひけ
 こけのおひに秋の山もと夕まくれななかゝいまは物もおもはず
 いはたゝむ山のかたそのこけむしろとこしなへにも物思ふかな
 いくよへぬかさしをりけん古へに三輪のひはらの苔のかよひち
 岩の上のこけの葉ことにおく露をたまく庭とみけるやはわか
 にはの面に苔のまからみかけてけりせきいれし水の末よわる迄
 おく山の木たかき松のさかりこけおなしみとりに年やふりぬる

貫之	躬恒	よみ人ふらす	清原元輔	權大納言公實卿	前中納言匡房卿	權中納言師時卿	源仲正	慈鎮和尙	皇太后宮大夫俊成卿	前中納言定家卿	基俊	從二位家隆卿	民部卿爲家
----	----	--------	------	---------	---------	---------	-----	------	-----------	---------	----	--------	-------

六帖題御うたこげな

御集夕立

寶治二年百首御うたきし
の苦

同

同

たにふかみとしふりにける岩かねの苔の葉なひきやま風そふく
風はやきをすての山のゆふたちこけなからちるまきの玄た露
住吉とおもはん人のためなれやきしに玄くてふこけのさむしろ
すみよしのうらはのきしによる浪の思はぬほとは苔むしにけり
まつとてもたれ住吉のきしもせん浪のかけほすこけのさむしろ

中務卿みこ鎌倉
同
後嵯峨院御製
衣笠内大臣
民部卿爲家

日蔭草

六帖題

同
百首御歌

百首御歌

ひかげ

日かげ

題不_レ知

爲家卿家百首

日かけもて軒端ふくてふたましつめ永き世かけて猶まつれとや
新六_六はかりや木の下くらきおく山にあるへくもなき日かけ草かな
消のこるかきねの雪のひまことに春をも見する日かけくさかな
續詞花
けふかさす神のいかきの玉日かけむかしのことを探ねてそくる
現存六
あかねさす日蔭のかつら千代かけて少女さひすもいはふ比かな
萬四
我宿のゆふかけ草の玄らつゆのけぬかにもとおもほゆるかも
たくひとてわかすむ宿のかへに生るみなしこ草もあはれいつ迄

前中納言爲兼卿
光俊朝臣
慈鎮和尚
ふみ人あらず
從三位行能卿
中納言家持卿
從二位家隆卿

山橘

題あらす

物語

貞應三年百首

六帖題

題不知

時鳥

家集草花薫風

家集

題不知

同

萬七
むらさきにいとをそわかよる足引の山たちはなを抜んと思ひて
萬廿
けのこりのゆきにさへてる足引の山たちはなをつとにつみこな
六五 萬四
あしひきの山たち花の色に出てかたらひつきてあふ時もあらん
岩間なる山たちはなのかけみえてそこまですめる庭のやりみつ
新六六
ふりにける卯月のけふのかみそきは山たちはなの色もかはらす
現存六
岩かねはみとりもあけもばへ色の山たちはなるときはかきはに

人 丸
ふみ人あらす
同 民部卿爲家
正三位知家卿
信實朝臣

浅茅

萬十
我宿のあさち色つくふなはりのなみしはのゝはもみちちるらし
同
わかやとの浅茅いろつくふなはりのなつみの上に時雨ふりつゝ
萬八
秋はきはちりぬへからしわかやとのあさちか花のちり行みれは
六六
ほとゝきす聲きくをのゝ秋風にあさちさけれやおとのともしき
つゆむすふ秋には早くなりにけりあさちか原のうつろふみれは
さらぬたに秋はくまなき月かけにあさちか花をつみはやしつる
萬六
印南野の浅茅おしなみさねし夜のけなくなれば家し去のはる
萬七
家にしてわれはこひなんいなみのゝあさちか下にてりし月よを

ふみ人あらす
同 穂積皇子
ふみ人あらす
修理大夫顯季卿
基 俊
赤 人
ふみ人あらす

貞應三年名所百首

三百六十首中

旅歌中

六百番歌合寫

洞院攝政家百首

永曆元年八月清輔朝臣家
後番歌合雪

文集百首

同

嘉元二年十月竹園御會

六帖題御歌あさち

題不_レ知

文應元年七社百首

文永十年每日一首中

文應二年每日一首中

洞院攝政家百首

おのつからぬる夜もさひし印南野のあさちおしなみわたる秋風

草木おふるあとのかはらのあさち野も残らす霜に枯はてにけり

今日も又道行_レくれているあさちおしなみたひねえてけり

あさちたつ庭のいろたにある物をのきはつたはうち時雨と

ふる雪のはなのあさちえろたへになにの草木もわかぬ比かな

みかりする片のを今朝みればあさちおしなみふれる白雪

露そむるかたのあさちえろたへに秋のよわたる風のさむけさ

宿しむるかた岡やまのあさちはらつゆにかたふく月をみるかな

此歌者文集百首黄茅岡頭秋日晩、苦竹嶺下寒月低といふこと

をと云々

露をえくみかきかはらのあさちふにふかきかけみる秋のよの月

このねぬるあさつゆさむみ水くきのをかあさちに秋風そふく

春日野のあさちか原におくれゐてその時となくわかこふらくは

秋風はけふよりふきぬかすかのあさちか露もいかにおくらん

ゆく秋のすす葉のあさち露霜のふるから小野をかねてえらるゝ

おほはらやをのあさちの冬かれに霜さえまさるよはの月かけ

ゆめかともさとの名のみや残るらん雪に跡なきをのあさちふ

民部卿為家

好忠

從二位行家卿

寂蓮法師

光明峰寺入道攝政

源雅重朝臣

前中納言定家卿

慈鎮和尚

參議為相卿

中務卿みこ鎌倉

よみ人あらず

民部卿為家

同

同

前中納言定家卿

百首御歌

建保三年名所百首

家集卅首歌夕蟲

六帖題

君臣御歌合

六帖題

家集三百六十首中

家集春歌中

續千載新上

あれにけり伏見の里のあさちはらむなしきつゆのかゝる袖かな
むさしのゝあさち色つくいまよりや夜さむの衣かりもなくらん
あらち山みねのあわ雪いかならんふもとのあさちうら枯にけり
あらち山夕日かくれのあさちはらいゐるつきぬとや蟲のなくらん

茅花

新六六

ふる川のきしのあたりのあさくさにつはな浪よる夏のゆふかせ

日影くれすゝしき山のかたくなり茅花なひきてかせわたるなり

あをみわたるゑはふの色もすゝしきはつはなさゆるゝ夏の夕暮

春もすき夏もきぬらし野へに出てつはなぬきにも誰をさそはん

つはなぬくあさちか原もおひにけり白わたひける家とみるまで

春雨のふるのゝ茅原今日見ればつはなぬくへくなりそゑぬらし

つはなぬく片野の原の壺すみれわかむらさきにいろそかよへる

菰

式子内親王

正三位知家卿

僧正行意

從二位家隆卿

民部卿爲家

前中納言爲兼卿

同

光俊朝臣

好忠

衣笠内大臣

前中納言匡房卿

題まらず

萬二玉かつら花のみ咲てならすあるはたか戀にあらめ我こひ思ふを
萬十一ゆふたゝみゑらつき山のさねかつら後もかならず逢んとそ思ふ

巨勢耶女
よみ人ゑらす

丹波路の大江の山のたまかつら絶んのこゝろわかおもはななくに

同

建保三年名所百首

六帖題されかつら

夕すゝみおほえの山もたまかつらあきをかけたる露をすゝしき
新六六思ふこと大江の山のさねかつらくるとあくとなけきつゝのみ

前中納言定家卿
正三位知家卿

建保三年内大臣家百首

文永六年毎日一首中

千首歌

六帖題御歌玉かつら

題不知(六帖)

爲家卿家百首

六帖題

寛元三年結縁經百首

秋ふかきすそのゝ露の玉かつらたゆるときなくむしのなくらん
み山木の末まではへる玉かつらとりつくかたもいまはなき身か
萬十一さねかつらいまする妹かうなひ髪るみゝいかりみきつゝ紐とく
はつかりの山とひこゆるさねかつらくるほとゑるき秋風そふく
新六六ときは木のかけのにしける玉かつら苦しき物と世をそゑりぬる
同五いそのかみふるのゝ小野の玉かつらかけて昔をこひぬ目はなし
草のはらうは葉にはへる青かつらくるしやことのゑけき夏野は

同
中務卿みこ
よみ人ゑらす

從二位家隆卿

從二位家隆卿

衣笠内大臣

同

民部卿爲家

鞭草

百首歌守山

蘆